告示第五号

昭和四十九年度財政状況の公表

『白根市財政状況の公表に関する条例』の規定により、昭和四十九年度一般会計予算の執行状況を、次のとおり公表します。

昭和五十年二月一日

白根市長　吉沢正五

苦しい民生費の増加

支出済額は十七億二千万円

こうなっています

市の家計簿

昭和四十九年度予算と、その支出状況など〝三万三千市民の家計簿〟を十二月末現在でまとめ、図で表わしてみました。

予算に対し、収入や支出が少なくなっていますが、五月の出納閉鎖でまとめる決算では、数字もかわってきます。

× × × ×

四十九年度の一般会計は、社会福祉対策や生活環境施設の整備などに重点をおき、当初二十億八千二百万円でスタートしました。その後の追加で二十五億一千万円あまりになりしました。

これは、四十八年度の同期にくらべ、約八億二千万円の増となっています。

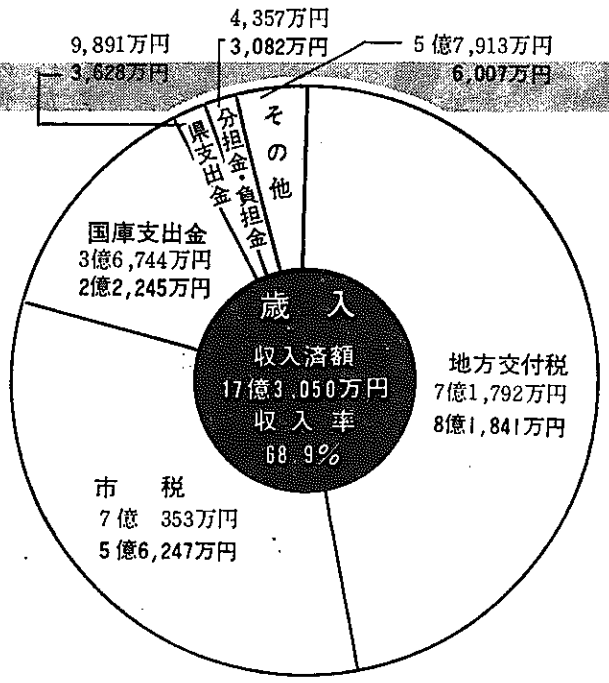
とくに、老人医療の無料化など実施している民生費と、道路整備や学校建設などを重点施策にもりこんだ土木費と教育費の予算は、ともに三億円をこしました。中でも、民生費の伸びは著しく、当初予算よりも一億八百万円余り増えています。

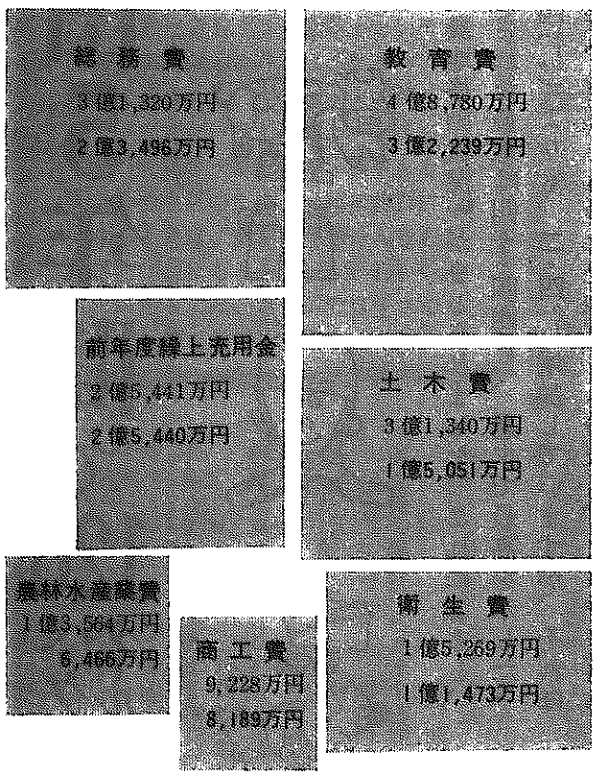
いままでに行なった主な事業をあげてみましょう。前年に引き続き都市下水路事業・鯰潟ポンプ場の建設を積極的に進めたほか、道路の改良舗装、第一中学校の校舎建設、し尿処理場の増設、児童公園の整備などがあります。

一般会計　予算額/25億1,050万円

※金額は上段が予算額、下段が収入・支出済額

歳出　支出済額　17億2,589万円　執行率　68.7%





市債額

合計　10億1,789万円

市債とは、大きな建設事業などのための借金で、次の内訳は過去に借りたものの残金です。

■借入先

▷郵政省……3億9,959万円

▷大蔵省……1億5,641万円

▷県貸し付け金……7,871万円

▷その他……3億8,316万円

市税

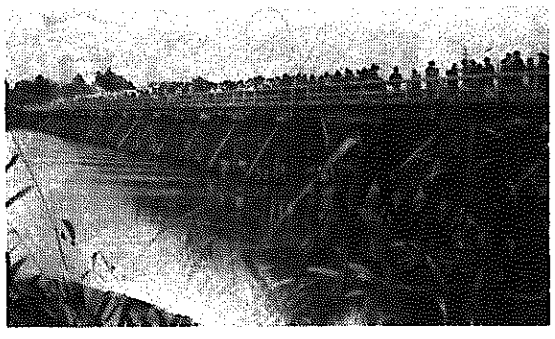
予算額　7億353万円
収入済額　5億6,247万円
収入率　79.7%

図中は収入済額と収入率

市民税 2億5,422万円 (74.8%)
固定資産税 2億241万円 (78.8%)
たばこ消費税 4,706万円 (100%)
電気税 2,629万円 (100%)
軽自動車税1,254万円(95.0%)
都市計画税1,030万円(77.9%)
その他 965万円(100%)

この予算で

▽交通安全施設整備事業＝七百二十九万六千円　▽老人医療助成費＝六千二百九十二万八千円　▽児童手当交付金＝三千二百四十一万五千円　▽生活扶助費＝九千七百一万八千円　▽妊産婦乳児医療助成費＝五百五十一万四千円　▽母子栄養ミルク支給費＝二百八十七万七千円　▽衛生センター負担金＝九千三百三十六万四千円　▽道路改良舗装補修＝六千七百万四千円　▽都市下水路整備事業＝一億円　▽地盤沈下対策事業＝四千九百十五万六千円　▽消防施設整備事業＝千九十八万三千円　▽大型防除機購入費三百四十万円　▽落葉果樹生産合理化パイロット事業＝千五十四万九千円　▽第一中学校建設事業＝二億三千九百八十万一千円

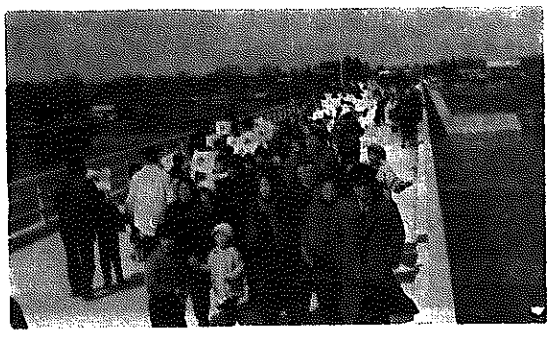


庄瀬橋の渡りぞめ風景

今昔 みる 目で 白根 【19】

地区民の思い出がいっぱいにきざまれた旧庄瀬橋――39年の新潟地震で全壊し1億8,000万円の工費で、長さ237m幅6mの永久橋に、生まれ変わりました。

写真〔上〕昭和27年の渡りぞめ〔下〕昭和42年の渡りぞめ　（庄瀬・桜井勇さん保存）



ふるさと探訪

白根のおいたち (6)

ようするに、幕府の重農政策と藩財政の重要財源である米作の拡張（新田開拓）が最優先緊急事業で、小吉島にあっても叙上の意を具体化し、幕府及び溝口氏などによる行政組織の充実によって、より組織的に推進されていった。ここに内外水の問題がクローズアップされたのである。

戦国の遺風がようやく沈静する三代徳川家光の正保元年（一六四四）に等運寺が信濃池田から新飯田に移転した。翌年の正保二年に作られたという白根郷絵図によると、小吉郷の中央部に白蓮潟という横十二町半深さ三十四尺、長さ十三町半の潟と茨曽根付近に沼が二つ記されている。

正保年代に青木兵右衛門という者が浄楽寺新田を開拓した。同地は正保三年に五百二十二石であったが、翌四年には二千二百八石という驚異的な増産が行われた。

この事例は慶安・承応年間（一六四八～一六五四）の検地帳によると、排水を必要とした湛水郷として、嵐潟・道潟郷（茨曽根）、頭無・大谷・三枚潟郷（小林）、白蓮潟（臼井）、鶴田・割田・上曽根・中谷内郷（鷲巻）、出来潟・多婦・曽根・田中谷内郷（根岸）などがあげられ、これらの潟沼の湛水を信濃・中之口両川の整備により放流する江丸の堀割工事が盛んに行なわれた波及效果の賜でもあったのである。

幕府の外様抑圧政策の結果といわれるが、慶安二年（一六四九）に茨曽根地区のおおむねが譜代の村上藩の領土となり、明治になるまで同氏の管掌する所となった。

この頃、青木豊右衛門という者が和泉を開拓し、慶安四年に庄瀬の人、真保次郎右衛門という者が古川新田を開拓している。新田開発は門外水を治めることと表裏をなし、土木技術が飛躍的に進歩したことが、容易に推測される。